

春の彼岸によせて

令和六年三月 大乘寺 長老 岡 光俊

独裁者のエネルギーは日々、強固なものとなり、異を唱えた者は、見せしめに逮捕、監禁、または処刑され、人々は「沈黙」を強いられています。

現在、戦争や紛争地域では、都市を壊滅状態にするために、毎日、数万発の砲弾、数百機のドローンによる攻撃が続いており、国を守るためには武器が必要な時代がまだまだ続くようです。

戦争はなにをもたらすのでしょうか。

我が国においても戦後約八十年、戦争中は、戦地だけではなく、我が国土すべての民の生活は食する物もなく、餓死同然の人々や病人が溢れていたそうです。医者に診てもらうにも、その医者も戦地へ召集され、医者に診てもらえず死ななければならなかった国民。

お寺に弔いをお願いしても、寺の僧も戦地に駆り出され、死んでも弔いもできなかつた多数の国民。

同じ種で、ここまで壊滅的に相手の命を無差別に奪おうとする動物は人間以外に存在するでしょうか。

人間は、「万物の霊長」といわれる「神の心」と、「魔王」といわれる「悪魔の心」の両方を持ち合わせているようです。

人間の「悪魔の心」については、今まであまり語られることはなかったと思いますが、自己を守る為にも、家族を守る為にも、先祖を守る為にも、そして地球を守る為にも、人間の「悪魔の心」を深く知ることが、「神の心」を知ることよりも重要ではないでしょうか。

人種を越え、この先、人間は、どうあらねばならないか。

我が国の和のおもてなしは、日本を知る世界の多くの人々に伝わっています。和の心、和の姿は、すべての日本の文化に溶け込んでいます。

銃を使うことなく、皆が力を合わせて生きている姿。

地球を愚かな指導者から守るためにも、世界の人々に和の心を取り入れて頂くことが重要だと思えます。

我が国のように銃ではなく、国民同士の信頼により成り立っている国が存在することを、地球上からすべての武器が無用であることを伝えるときです。

人間同士の信頼回復を目指さずして、精神的にも肉体的にも人類が生き続けることが困難な状況に世界が動いているのではないのでしょうか。

この瑠璃色の地球を滅ぼす存在は、今の世界の動きからエイリアンではなく、人間自らではと思えてきます。

私たち人間は、それ程、愚かな生き物であることを自覚し、危険な存在であることを三千年前から見抜いておられたお釈迦さまの教えを改めて実践しなければ、間に合わないところまで暴走していません。

春の彼岸、人類の変わりない醜い争いは、全人類の未来に確実に大きな「負のエネルギー」となることは間違いないでしょう。

怒りや嫉妬、愚痴の「負のエネルギー」を協力と喜びに変換できる「佛智」を人類すべてが持つことができれば、人類は救われるのです。

殺戮を好む者には  
嫉妬を生ずる者には

大悲の心を起こさしめ  
随喜の心を起こさしめ

愚痴多き者には

智慧の心を起こさしめ

この「佛智」は、古来より、世を憂いた人々や僧たちがお釈迦さまの教えに出逢い、修行し、体得されたものです。それらの教えを全国津々浦々、一人一人に解り易く説こうと取り組んでこられたのが、「辻説法」であり、これらは落語、漫才として現在に引き継がれています。

また読み書きもできなかった無学の人々までも救おうと、身振り手振りのみで伝えようと始められたのが、「京都壬生狂言」。現在の狂言、能、歌舞伎として発展していったものです。

今、私たちは、自分から子孫に、そして世界の隅々まで潜在している「負のエネルギー」を「正のエネルギー」に変換する「佛智」を身につけ、継承していくことが、必要ではないでしょうか。

人間は、誰もが「悪魔の心」を持っていることを自覚し、「佛の心」に変えない限り、家庭であっても、学校、職場であっても、国家であつても、虐め、喧嘩、破壊、戦争、侵略から守る方法があるとは思えません。

そこには、必ず「悪魔の心」を持っている人間が決断、指示するからです。

桜の花が咲き誇る春の彼岸、ご家族揃って参拝して頂き、ご先祖さまのお陰で、ご家族が存在できていること、今の平和も、ご先祖さまのお陰で成り立っていることを、改めて意識し、感謝し、子孫に伝える機会となれば、ご先祖さまもお喜びのことと思います。

合掌